萩市弘法寺所在の笏谷石灯籠
―近世初期日本海海運の一齣―

阿　部　　来

Stone Lanterns in Koboji Temple, Hagi City:
A Scene of Sea Transport on the Sea of Japan in the 17th Century

Rai Abe

山口県立山口博物館研究報告

第51号（2025年３月）別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.51（March 2025）

山口県立山口博物館研究報告　第51号　49～56頁　2025年３月

萩市弘法寺所在の笏谷石灯籠
―近世初期日本海海運の一齣―

阿部　　来[1)]

Stone Lanterns at Koboji Temple, Hagi City:
A Scene of Sea Transport on the Sea of Japan in the 17th Century

Rai Abe[1)]

Abstract

The stone lantern at Koboji Temple in Hagi City is made of Shakudani Ishi from Fukui Prefecture. The stone lantern records the names of Morita Yagouemon, wealthy merchants in Hokuriku region, and is thought to indicate the actual state of Japan Sea shipping in 17th century. We would like to link this to the preservation of cultural heritage.

はじめに

萩市土原に所在する真言宗弘法寺は、大同２（807）年に創建され、寄舟山弥勒院と号したと伝わる（萩市史編纂委員会1983）。戦国時代には兵火で衰えたが、中興開山隆澄（慶長２（1597）年没）・２世空泉（寛永16（1639）年没）のころに、毛利氏の庇護により再興されたという。松本川河口にある境内地は中州であったが、貞享４（1687）年に橋が完成し、萩城下町と陸続きとなった。

弘法寺境内地の西側に位置する開山堂前に２基１対の石灯籠がある。内田伸氏は、石灯籠は越前で産出する笏谷石製であり、銘文から三国の豪商森田弥五右衛門が北陸から資材を運ぶ航海の安全を祈り、弘法寺に寄進したものとして位置づけた（内田1985・1990）。また、印牧邦雄氏と印牧信明氏は福井県外において三国湊の商人が寄進した笏谷石石造物の事例として、弘法寺の石灯籠を挙げている（印牧邦雄1979、印牧信明2005）。

本稿では、弘法寺所在の笏谷石灯籠に関する基礎的な情報を整理する。また、寄進者である森田弥五右衛門についても検討し、近世初頭の日本海側における地域間交流の一端について述べる。

１）山口県立山口博物館（考古）

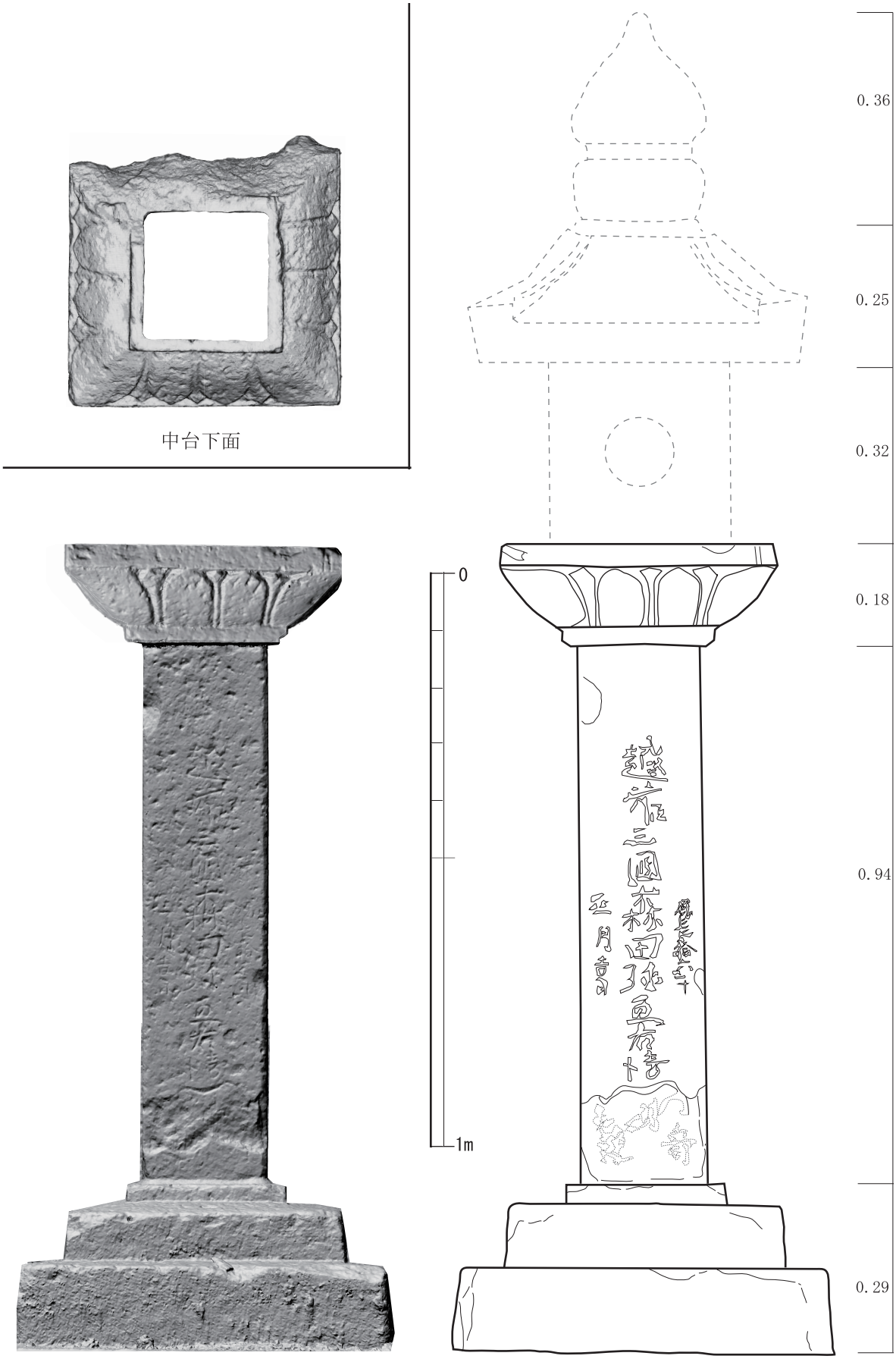

図１　弘法寺笏谷石燈籠東面

1　笏谷石灯籠の所見

北側灯籠は、宝珠・笠・火袋は安山岩、中台・竿・基礎は緑色凝灰岩を用いて製作しており、前者は萩の笠山石、後者は越前の笏谷石である。火袋から上も本来はすべて笏谷石で製作されていたが、いずれかの段階に破損し取り換えられたようである。また、南側灯籠は、すべて笠山石製であり、北側の後補部分と同様である。

本稿で報告する北側灯籠は、６石で構成され、現在の総高は234㎝である（図１）。基礎の平面形は四角形を呈し、３段で構成される。下から１段目は南北66㎝、東西66㎝、高さ15㎝、２段目は48×48×11㎝、３段目は28×29×３㎝を測る。装飾は確認できず無地である。１段目と２段目の上面はやや丸みを帯びている。

竿は四角柱形で、南北21㎝、東西21㎝、長さ94㎝を測る。中台との連結内部には凸部を造出している。下端はモルタルにより基礎と接着されている。装飾はないものの、西面には３行の文字が刻まれている。中央には「越前三国森田弥五右衛門」の文字が残るが、下端から約16㎝の範囲は表面が剥離しており判読できない。過去の報文（山口県教育委員会1984、内田1990）および山口県文書館所蔵の内田伸採拓史料から、下端の文字は「尉　竒進」と推定した。また、南側は「慶長拾六年」、北側は「三月吉日」と判読できる。この銘文は、山口県内における石灯籠では最古の事例である（内田1985）。

中台は、西面が大きく破損しているものの、下辺27㎝四方、上辺47㎝四方、高さ18㎝を測る。側面は無文で厚さは、下辺２㎝、上辺５㎝である。上辺の南西隅には南面と西面に２条の縦線が刻まれている。下面は隅角に大形の素弁１、各辺中央に素弁２を配した素弁十二葉の連弁文で、各弁の間には間弁を彫り出している。上面の火袋受部は、各辺幅８㎝の縁を残して、南北30㎝、東西30㎝の範囲を深さ１㎝程度掘り込んでいる。南面の破損部からは、竿の上端に設けられた枘が確認できる。

後補の火袋は南北30㎝、東西30㎝、高さ32㎝を測る。東面は直径12㎝の円形、西面は長さ17㎝前後の三日月形の窓を穿つ。北面は一辺19㎝の四角形の火口で、四辺に幅約１㎝の枠を掘り込んでいる。火袋の内底面は火口下辺とほぼ水平である。南面は壁になっており、とくに石材表面に孔が多くみられることから、意匠として選択したものであろう。なお、火袋の下端北側はモルタルで接着されているが、中台の受部上端から幅約２㎝離れた位置に据えられているため、当初の笏谷石製火袋は若干大きかった可能性が高い。

後補の笠は、平面四角形の反り屋根で、上面の長辺は南北58㎝、東西58㎝、高さ24㎝を測る。四隅の降棟は上端で幅約４㎝である。軒先の隅角上面は幅８㎝の方形を呈する。隅角の厚さは10㎝、各辺の軒口は厚さ７㎝を測る。軒裏は平坦で、側面は無地である。笠の上面は、23㎝四方、高さ２㎝の受部を造出する。

後補の宝珠は、一石で彫成し、最大径は宝珠22㎝、露盤24㎝で、高さは36㎝を測る。宝珠は先端を欠くもののやや尖り気味である。石材は安山岩で火窓に比べて緻密である。

2　笏谷石灯籠の類例

16世紀から17世紀前葉における笏谷石灯籠の紀年銘資料としては、福井県福井市江上町金劔神社の六地蔵灯籠１基（天文６（1537）年）、鯖江市水落神明社参道脇の石灯籠１基（慶長13年）、福井市品ケ瀬町八幡神社の六地蔵灯籠１基（慶長13年）、越前市正覚寺の結城秀康四男吉松丸石廟（慶長14年）前の六地蔵灯籠１基、石川県金沢市慈雲寺の慈雲院（冨田重政）廟（寛永２年）前の石灯籠２基１対、羽咋市永光寺五老峯の石灯籠２基１対（寛永６年）などが三井紀生氏により紹介されている（三井2002ほか）。これらのなかで弘法寺石灯籠に近い事例は、水落神明社参道脇の石灯籠と慈雲院廟前の四角形石灯籠である[(1)]。

水落神明社参道脇の石灯籠は総高250㎝で、基礎・中台・火袋・笠は四角形、竿と宝珠は円形である[(2)]。基礎は２段で反花座は、隅角は覆輪つきの大形素弁１、各辺は覆輪つき素弁１を配する単弁八葉で、各弁の間には間弁を配する。竿には「慶長十三年」の銘が刻まれている。中台下面は基礎の反花座と同様の単弁八葉で各弁に間弁を備える。側面と上面は無地である。上面には火袋を据える方形の彫り込みをもつ。火袋は参道側の東面に方形の火口、北面に円形、西面は三葉、南面に三日月形の窓を設けている。屋根は照り起り屋根で、四隅の降棟は軒先で厚くなっており、軒先の隅角上面は方形となる。宝珠は宝珠と露盤を１石で彫り出している。

慈雲院廟前の石灯籠は、各部の平面形は四角形、基礎は２段である。北側灯籠の反花座は隅角に覆輪を持ち弁頭が窪む大形の単弁１、各辺にも同様の単弁２を配する単弁十二葉となる。南側灯籠の反花座は隅角に大形の素弁１、各辺中央に素弁１を配する素弁八葉である。いずれも各弁の間には間弁を彫り出している。前面にあたる竿西面には３行の銘文を刻む。中台下面には隅角に大形素弁１、北側灯籠は各辺に素弁２、南側灯籠は素弁３を配しており、北側は素弁十二葉、南側は素弁十六葉で、各弁の間には間弁を刻む。中台上面は中央に火袋を据えるための彫り込みを行う。火袋は、火口は東西方向に貫通し、四辺の縁には枠を掘り込む。参道側は火口よりも若干上下が大きい枠を区切り、枠内全体をごく浅く点描状に彫り込み、雲状の装飾の上に小ぶりな三日月窓を中央に設ける。外側は同様の枠内を点描状に浅く彫り込み、中央に雲状の装飾の上に円形窓を切る。笠は、照り起り屋根で、四隅の降棟は軒先で厚く上面は方形を呈する。宝珠は宝珠と露盤を１石で造出している。

このほかに、発掘事例としては一乗谷朝倉氏遺跡112次調査出土の宝珠・笠・竿・基礎がある（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館2023）。笠は照り起り屋根で四隅の降棟は軒先で厚く方形となる。笠の上端中央には四角形の受部を造出し、軒先下面は四方に外縁を設ける。「元亀二年」（1571）の銘を有する竿は四角柱形であり、各面に舟形光背を持つ観音菩薩立像・阿弥陀如来立像・地蔵菩薩立像・釈迦如来立像を掘り込む。これらの四方仏や銘文には朱を接着剤にして金箔が施されていたという。なお、紀年銘資料ではないが、天正元年を下限とする一乗谷では42次調査でも基礎・中台・宝珠が出土している（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館2024）。42次調査の中台は下面隅角に大形の素弁、各辺中央にも素弁を配する素弁八葉で、各弁の間には間弁を線刻する。

これらの事例については、形態の細部には差はあるが、弘法寺石灯籠との共通点が多い。また、弘法寺石灯籠の後補部分、とくに笠の屋根や降棟の形状、軒口の処理などは類似した特徴を示している。そのため、弘法寺石灯籠の後補部分は、破損前の状態を復元して製作されたと考える。

3　森田弥五右衛門尉

石灯籠を寄進した森田弥五右衛門尉は、越前三国湊を代表する豪商である。三国湊は越前最大の河川、九頭竜川の河口に位置しており、古代中世を通じて荘園年貢の積み出し港として大きな役割を果たした。近世にも越前諸藩の物資積み出し港や西廻り航路の中継港として発展し、廻船商人の根拠地となっていた。また、宝亀９（778）年には渤海使が「坂井郡三国湊」に来着し（『日本書紀』同年九月二日条）、天文20年には唐船が入港して唐人120人ほどが上陸した（『朝倉始末記』「唐船湊へ着岸之事」）ように、国外からの来航もみられた。

森田氏は中世三国において、問丸衆筆頭の地位にある有力な商人であった。三郎左衛門道空の時、加賀より来住して経ヶ岡山の城主となったと伝える（三国町史編纂委員会編1983）が、中世から三国湊に居住していたともいわれる（福井県教育委員会2006）[3]（図２）。

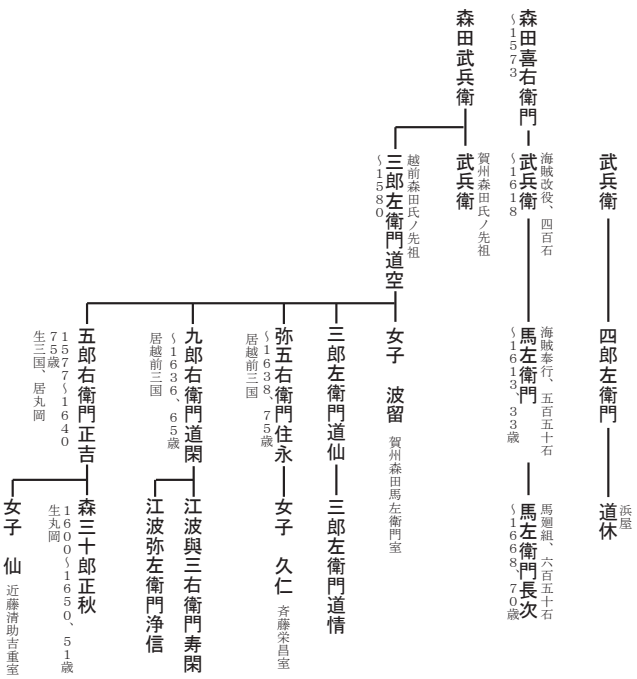

図２　森田氏略系図

森田三郎左衛門道空は、三国湊の位置する坂井郡の有力国人である堀江景忠に従属していたようである。越前が本願寺支配下にあった天正３年３月に景忠は、森田三郎左衛門を神波七兵衛とともに密かに敦賀に遣わして、織田信長の家臣である武藤宗右衛門に信長に味方をする旨を約束し、本領安堵と加賀２郡を得る朱印を獲得した（「信長殿越前へ御入国之事」『越州軍記』）。三郎左衛門道空は、天正３年８月には信長から忠節を尽くしたことにより、領地安堵の朱印状を与えられている（福井県1984「森田正治家文書」１号）。天正５年には、信長に前年９月に上杉謙信が能登七尾城を落城させたが、いったん越後へ引き上げた際の状況を知らせ、能登方面での軍事行動において船の手配を迅速に進めたことなどを感謝されている（２・３号）。さらに、柴田勝家からは上杉領国であった越後・越中・能登から三国湊に入港した船を出航させないよう命じられている（４号）。天正５年５月に堀江藤秀（景忠）が滝谷寺に宛てた書状のなかには、森田から情勢を伝える旨が記されている（滝谷寺文書142号）。このように三郎左衛門道空は、景忠や信長に接近しつつ、三国湊を拠点として敦賀や能登など他国の状況に通じた土豪的商人であった。

天正８年６月20日に三郎左衛門道空は没した[4]が、嫡男の三郎左衛門道仙、次男の弥五右衛門住永、三男の九郎右衛門道閑は三国湊に居住して問丸として活動していたようである。天

正９年には柴田勝家が三国湊に７か条の定書を出しており（５号）、三国湊はその後も北庄城主の支配下にあった。三国湊の問丸に対しては、天正11年には丹羽長秀が諸国の船や商人の保護（７号）、慶長２年には堀秀治が京都への米輸送を命じている（９号）。

弥五右衛門は、各地の大名から特権を得て、商業活動の基盤を拡大していった。慶長13年には佐渡代官の大久保長安より「六枚かいのふね壱艘、佐州中かい役赦免」の特権を与えられた（12号）。また、加賀前田家臣の斎藤兵部より江沼郡の米を北潟から三国を経て、敦賀へと輸送するように依頼をうけ（13・14号）、元和５年４月には藩主前田利光（利常）から船５艘について領内の諸浦出入役を免除されている（10・16号）。そして、寛永５年には三国湊の船にかぎり森田弥五右衛門の出す船切手次第で領内の浦々において間役を免除されている（17号）。このような文献史料からは、弥五右衛門が金銀山開発の進む佐渡や一族の拠点である加賀といった北陸周辺の海域を商圏としていた状況がうかがえる。

さらに、弘法寺に寄進された笏谷石灯籠は、森田弥五右衛門の活動範囲が西に約480㎞も離れた長門萩にまで及んでいたことをあらわす物証である。弘法寺は、萩城下町における真言宗の古刹であり、当時は河口部の中州という日本海航路との接続性の高い立地といえる。弥五右衛門は、材木や米などの物資を慶長９年に建設の始まった萩城下町に供給し、その縁により笏谷石灯籠を寄進したと考える。

おわりに

弘法寺所在の笏谷石灯籠は、17世紀初頭における笏谷石製品の分布において西端の事例である（阿部2024）[5]。また、越前三国湊の豪商、森田弥五右衛門の事績とともに、中世末から近世初頭の日本海海運による地域間交通や物資流通を端的に示している。長門萩と越前三国の関係性は、近世初期の日本海海運がもたらした地域発展をあらわす重要な資料といえよう。

笏谷石灯籠の類例についてはさらなる掘り起こしとともに、保存も重要と考える。内田氏の採拓時には残っていた竿下端の文字は、現在は剥離して不明になっている。軟質な凝灰岩に破損はつきものである。資料の検討を進めることで、関心を高めていく必要があろう。

【謝辞】

現地調査に際しては、弘法寺住職小野晋英氏のご高配を賜りました。また、萩市教育委員会柏本秋生氏、山口県文書館吉田真夫氏・山本明史氏には、資料調査などにおいて種々ご教示を頂きました。銘文の判読は山口県立山口博物館山田稔氏、三次元データの分析は奈良文化財研究所山口欧志氏よりご助言を賜りましたが、いずれもその責は筆者に帰するものです。記して感謝申し上げます。

註

⑴　京都府京都市阿弥陀寺の織田信長廟石灯籠（天正13年）については、製作は元和年間以降との指摘がある（古川2022）。

⑵　鯖江市指定文化財。説明板には「東大寺法華礼拝堂前に建てられていた伊行末が作った灯籠を写したものと伝えられ」るとの記述がある。

⑶　略系図は「森田家系譜」（三国町史編纂委員会1975）および加賀森田家に関する成果（永山1899、金沢市立玉川図書館近世史料館2019）をもとに作成した。「森田家系譜」によると、三郎左衛門と前田家に仕えた森田武兵衛は兄弟である。武兵衛は、海賊改役をつとめて、加賀大野湊に居住し、慶長４年に隠居した。翌年の大聖寺城包囲戦に際しては、利長の命令によって一族の三郎左衛門、弥五右衛門等を訪ねている。なお、森田武兵衛の父喜右衛門は朝倉義景の家臣に仕え、天正元年に一乗谷で戦死したとされる。武兵衛の子馬左衛門は海賊奉行となっており、室は森田三郎左衛門道空の娘であった。このように武兵衛、馬左衛門は大野湊を拠点として前田家領国の海上交通や港湾支配を担ったようである。また、越前森田家の墓所がある三国性海寺の石廟には「慶長十二年丁未二月吉日」「施主森田武兵エ尉」の刻字（関根2011）があり、武兵衛と三国湊との直接的な関係を示す資料といえよう。

⑷　性海寺に所在する森田家墓所の一石五輪塔銘文（印牧1979）による。

⑸　17世紀中頃から後期の事例としては、宇部市西宮八幡宮所蔵の狛犬がある（山下2023）。

引用参考文献

阿部来2024「笏谷石製品の流通と大坂城」『関西近世考古学研究30』
内田伸1985『山口県の石造美術』マツノ書店
内田伸1990『山口県の金石文』マツノ書店
笠原一男・井上鋭夫 校注1972『日本思想大系第17巻　蓮如 一向一揆』
金沢市立玉川図書館近世史料館2019『浜屋文庫展』
印牧邦雄1979「九頭竜川の河口集落と文化」『日本海地域の歴史と文化』文献出版
印牧信明2005「近世前期の日本海海運と商品流通―北国海運と西廻り海運の発展を中心に―」『日本海域歴史大系　第四巻　近世篇Ⅰ』清文堂出版
京田良志1970『石灯籠新入門』誠文堂新光社
関根達人2011「石廟の成立と展開」『日本考古学』第32号
永山近彰編1899『加賀藩史稿』第７巻　尊経閣（国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/764564)
萩市史編纂委員会1983『萩市史　第1巻』
福井県1984『福井県史 資料編４　中・近世二』
福井県教育委員会2006『歴史の道調査報告書６　馬借街道・海の道』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館2023『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告21』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館2024『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告22』
古川登2022「京の笏谷石製品」『中世・近世における石のまちづくり調査研究報告書』奈良文化財研究所 福井・勝山日本遺産活用推進協議会
三国町史編纂委員会1975『三国町史料　海運記録』
三国町史編纂委員会編1983『修訂三国町史』
三井紀生2002『越前笏谷石―北前船による移出・各地の遺品―』福井新聞社
三井紀生2006『越前笏谷石　続編―越前仏教文化の伝播を担う―』福井新聞社
三井紀生2009『越前笏谷石　第三編―よみがえる歴史と人間像―』福井新聞社
三井紀生2018『越前笏谷石―歴史と移出の論考集―』福井新聞社
山口県教育委員会1984『未指定文化財総合調査報告書　石造文化財編』

山下立2023「山口県下の注目すべき狛犬二題－瓦造狛犬の古例と西限の笏谷石製狛犬－」『史迹と美術』936号